

# 玉村町における天明泥流到達範囲

—— 天明三年浅間災害に関する地域史的研究 ——

関 俊 明 ・ 中 島 直 樹

- |                     |                  |
|---------------------|------------------|
| 1. はじめに             | 5. 玉村町の特明泥流到達範囲図 |
| 2. 目的と方法            | 6. 発掘調査事例と想定線    |
| 3. 玉村町の立地と環境        | 7. 踏査確認地点        |
| 4. 史料による玉村町域の泥流被害状況 | 8. まとめと課題        |

## —— 論文要旨 ——

群馬県のほぼ中央に位置する玉村町では、これまで開発に伴う天明三年(1783)の浅間災害遺跡の発掘調査事例が多い。このことと反して、人口の急増による開発や社会変化により、浅間災害にかかわる資料や災害伝承が失われつつある地域のひとつであるということも否めない。

この災害によってもたらされた泥流堆積物の分布について、これまでいくつかの到達範囲の想定がなされている。

吾妻川上流域の長野原町において、発掘調査で確認された資料や供養塔などの存在をはじめ、伝承の聞き取り、踏査などの地域的な取り組みから、実質的な都市計画図レベルでの「天明泥流到達範囲図」の作成をおこなった。この作業により、災害伝承の経過についての視点で成果をあげることができた。

本稿では、同様な手法で、玉村町域の特明三年資料の整理と集約をおこない、泥流到達範囲図の作成を試みることにした。

これらの取り組みは、災害遺跡を発掘調査するための基礎資料となるのは無論、過去の災害を正確に伝承し、災害教訓としていくための基礎資料として重視できると考えた。さらに、天明三年に関する発掘調査成果の還元方法のひとつともいえる。

ささやかではあるが、今日社会の変化にともない伝統や伝承が途絶えようとしている中での、歴史災害をもとに未来創造につなげていくための地域史的な視点の取り組みとして着目していきたいと考える。

### キーワード

対象時代 江戸時代 天明三年

対象地域 群馬県佐波郡玉村町

研究対象 天明三年浅間災害 天明泥流

## 1. はじめに

本稿で扱う天明三年(1783)浅間災害は、新暦8月5日(以下、新暦を算用数字)午前の浅間山噴火で発生した吾妻川～利根川を流下した天明泥流による被害をいい、ここでは、数時間後に被災した佐波郡玉村町における被災範囲の確定を目指すものである。

玉村町は、この20年で人口が倍増するという人口増加率で知られた地域である。開発に伴う小規模な行政発掘が頻繁におこなわれ、天明三年に関する発掘調査や試掘の数は面的に分布し充実している。その成果の集約、加えて浅間災害に関する伝承や関連事項を収集し、玉村町及び一部周辺における、実質的なレベルの天明泥流到達範囲図を提示しようと試みた。

筆者のうち中島は同町で文化財を担当し、これまでおこなわれてきた発掘・試掘調査をつぶさに集約し、把握に努めてきた。これまでの15年来の発掘調査データを整理・集約し、今後の蓄積資料としての視点の明確化を図る意味からも、今回の作業を重視した。

また、遺跡の発掘調査事例の中では、泥流到達の境界付近で、「天明泥流堆積物が確認されない」という確認事項も到達範囲を確定するデータとして扱った。

## 2. 目的と方法

### (1) 前例と目的

天明三年浅間災害現象の一つである8月5日の泥流流下については、発生から流下の過程も含め、未だ以て不明な点が多い。

渋川で利根川に合流する、流域76km余りの吾妻川上流に位置する長野原町の例では、「吾妻郡長野原町のせまい吾妻溪谷に、流出物がつまってせきとめられた吾妻川は逆流し、長野原の宿場はほとんど埋没、その川上の坪井村も全滅した。」といった伝承が地元の人々に伝わっていたと考えられる例がある(萩原 1975)。

近年の発掘調査の成果による天明泥流堆積物の確認、さらにその到達範囲の境界の確定、また地元につながる伝承、供養塔などの存在、現地踏査による判別などが判断材料になると考え、融合的に組み合わせることにより、天明泥流の到達範囲境界を実質レベルで把握できるのではないかと考えてきた。

筆者のうち関は、これまでこのような手法をたよりに、長野原町域分の「天明泥流到達範囲図」(1:10,000)の作成をおこなった(群埋文 2003)。作業の結果、前述の吾妻溪谷での、少なくとも巨大な堰上げの伝承は、誇張表現が加わったものであることが判然とした。

発掘調査で得られる資料は、災害伝承や史実の継承などといった歴史資料やフィールドワークとの援用で、より詳細な実態の把握につながることが成果としてあげられるようになってきた。

浅間山火口からの流下距離で約100km、利根川中流地点付近での天明泥流被害範囲の確認作業をおこなったのが今回提示の内容であり、玉村町域での地域的な歴史災害資料・防災データの集約という視点にも関連する。①聞き取りや伝承によりある程度の把握が可能であること、②近年の発掘・試掘調査の資料により有効なデータを得ることが可能になっていること、③これまでの吾妻川の上流域などでの泥流到達範囲確認の作業で培った積み重ねをもとに作業できる、と考えたことなどを足掛かりとした。

ここでは、天明三年浅間災害現象の一つ天明泥流の到達範囲把握作業という、資料蓄積に向けての取り組みであり、今後の天明泥流の流下メカニズム解明の基礎データとなりうるという判断のもとでの取り組みでもある。

なお、本町域は、浅間山火口の東南東に位置し、降下軽石による被害が顕著な方向軸に位置する地域であるが、今回の検討には、軽石被害は加えていない。

### (2) 天明泥流到達範囲図の作成

これまでにも、吾妻川～利根川流域の天明泥流堆積物の到達範囲や痕跡は、堆積物の分布や地域的な聞き取りなどから、定量的に示そうとするいくつかの到達範囲の想定がなされている。しかし、実資料である発掘調査の成果を盛り込み、実質的なレベルで範囲想定をおこなうまでには至っていなかった。

天明泥流堆積物の流下範囲を想定した先行文献及び関連する資料・史料絵図で参照できたものは、以下の通りである。

- ①『玉村町遺跡分布地図』〈中・近世〉1991 玉村町教育委員会
  - ②『平成元年度 浅間山火山調査』(財)砂防・地すべりセンター
  - ③「玉村町の地形分類図」『玉村町誌』通史編 下巻二 1995
  - ④『平成13年度 火山地域における砂防指定地検討業務報告書』(財)砂防フロンティア整備推進機構
  - ⑤『群馬県史』通史編1 1990
    - a「那波郡四ヶ村群馬郡三ヶ村計七ヶ村地先新開願場所絵図」天明四年辰十一月 五料沼之上村文書(以下、「a七ヶ村絵図」)
    - b「天明三癸卯七月八日泥押変更七分川三分川略図」五料沼之上村文書(以下、「b変更略図」)
    - c「明治前期測量 フランス式彩色絵図」1885(明治18年迅速図)復刻(財)日本地図センター1:20,000(以下、「c迅速図」)
    - d「玉村町浅間押砂地分布図」1935『玉村町郷土誌』
- 踏査においては、どれだけ被災当時の地形が残されているかが大きな鍵となる。特に本町においては、天明三年以降多発した水害による地形の変化が大きく影響して

いる。また、今後の開発による現状の変更を考えれば、当時の地形景観を伝承や踏査により復元するのが限界となるのも、それほど先のことではないかもしれない。

a 七ヶ村絵図とb 変更略図からは、泥流被害にあった田畑と天明三年の被害状況によりその範囲がどこまで及んだか、天明六年の水害がどの程度の地形変化をもたらしたかを読み取り、推定することができた。このことから、c 迅速図の土地利用状況を天明泥流堆積物の堆積とクロスさせる有効性が確認できた。その内容については後述していく。

### 3. 玉村町の立地と環境

群馬県佐波郡玉村町は、県の中央やや南に位置し、関東平野と北部山間地の境界に相当する前橋台地の南端部に立地する。

全体的には北西から南東方向にかけて緩やかに傾斜し、標高75～60mを測る。傾斜方向に沿って利根川が、また南には烏川が流れ、町の南東部で利根川と合流する。微高地と後背湿地が入り組む地形は、河川（利根川、烏川以外の河川を含む）による浸食を絶えず受けてきたことを物語っている。これらの川が流れる前橋台地は、前橋砂礫層の上に、2万年以上前の浅間山噴火に伴う前橋泥流の堆積によって形成されたものである。

全体的には平坦な低地である地形を活かして、古代から水田地帯であったことを発掘調査から知ることができる。また、現代の土地改良以前には低湿地と微高地による土地の起伏があったが、それらを現在地形から確認することは一部を除いて難しい。

近世には日光へ通じる例幣使道の宿場として玉村宿が置かれた。また、灌漑用水として重要な滝川の開削がおこなわれている。また、利根川には、五料河岸や川井河岸が置かれ、物流の拠点として栄えるとともに、関所や番所が設けられた。

現在は、二毛作の田園地帯と工場地域、隣接都市のベッドタウンとしての景観が混在する。他地域からの人口流入により過去20年で人口が2倍になるなど、町は大きく変貌を遂げている。

開発の波は現在商店街をなしている旧例幣使道に影響を与え、築50年以上の建築物が消滅していった。官民一体の「まちづくり玉村塾」の活動はこうした歴史建物資産を見直し、街なみ保存の方向を模索している。

また、開発によって、旧地形やかつての河川決壊が忘れ去られる中、地域防災の役割を担ったFMラジオ局設立の動きもあり、地域単位で防災に取り組む姿勢が問われるようになっている。

### 4. 史料による玉村町域の泥流被害状況

#### (1) 史料・伝承にみる8月5日の被害状況

3か月におよんだ天明三年浅間災害の経緯と被災遺跡の関連（関 2005）や玉村町域の各村々地点毎の史料記述による被害状況についてはここでは省略し、人的被害という点で最大の災害現象が発生した「8月5日の状況」を、玉村周辺での様子を中心に、史料や文献をもとにたどっておくことにする。

公田村（現前橋市公田町）の石原清蔵の記録「浅間山大焼変水已後日記」（萩原 1986）によれば、「七日夜中戸障子なり、電（ママ雷？）八日（新暦8月5日）の朝迄いたすなり。皆人夜中はねぶらず、夜を明し、内八日の朝細ケ成石降、夫より泥まじりの雨ふり、九ツ過に広瀬川江満水の由、家道具杯流レ参候。利根川は勿論兩岸江一はいに成、…」とある。5日の朝方まで降下物があったことは、火山史料研究の噴火エピソード（Yasui・Koyaguchi 2004）で確認されていることと全く一致する。記述によればその後、泥の雨が降り、正午過ぎには天明泥流が到達する。この「浅間山大焼変水已後日記」は、前橋市一帯の被害状況から復旧までを詳細に記録していることから、この地域周辺で記録された信頼のおける史料の一つと考えられている。

また、3キロほど下流の新堀村（現前橋市新堀町）で記録された「浅間山焼覚」（萩原 1986）には、「利根川押込事山の崩れたるがごとく、利根川の水を瀬切り一里斗り上江流其川の水瀬に乗て崩れ一旦に押来ル事矢よりも早押開く。夫共不知川下ニては当村の人々は満水と心得、川辺江網子を持出魚を汕（スク）はんとせし所に泥流ニて箱長持流来て…」と、天明泥流が襲う記述が続く。

さらに、「天明三年七月那波郡村々ほか利根川泥流状況記事」（『群馬県史』）には、「那波郡五料の人の語れり、八日昼時前利根川俄に水干落、岡と成魚砂間に躍る、誰有て心附かず、我先にと川へ入り魚拾いとる事…、手足濡さず魚を取得し処に、川上七八丁先を見渡せば川霧のごとく押し来れるに驚き、…何かハ以てたまるべき皆人泥水に溺れ流失す、跡も見ずして高き所に逃登るものハ命助かりけり、…」とあり、著者は、さらに上流の川幅の狭い所では堰が出来、川下で水が溢れたのだらうと推測し、利根川通り勢多郡、群馬郡は川筋の傾斜が緩いので、泥水は即時には押し上がり、家々もすぐに流れてしまうことはなかったのだが、そのうちに二階へも泥水が及び、流れていってしまった、と記録している。

これらの玉村近隣の出来事を扱った記述は、天明泥流が利根川と合流した後、どう流下したかを知る上では、極めて重要である。①一時泥流の滞留があって、人々が川に入って魚を捕る時間が発生している、②その滞留がどこでどのように起こったか、③川の流れが狭窄する場合と広がる場合での泥流の流下の違い、などの視点が注

目できる。

①については水が引いてから人々が魚を捕りに集まるという比較的長い時間の滞留がみられる点に着目できる。②では吾妻川の吾妻溪谷で堰上げがあったと推定されていたり、四戸村(菊池 1981)や中之条町付近の逆水や段浪と思われる記録が残されていたりする。しかしながら、それより下流で、この地点までの間に、「水干落」を説明する様な記述を確認することが出来ない。このことから、例えば、利根川との合流地点などでの、記述との検証でヒントが得られるかもしれない。

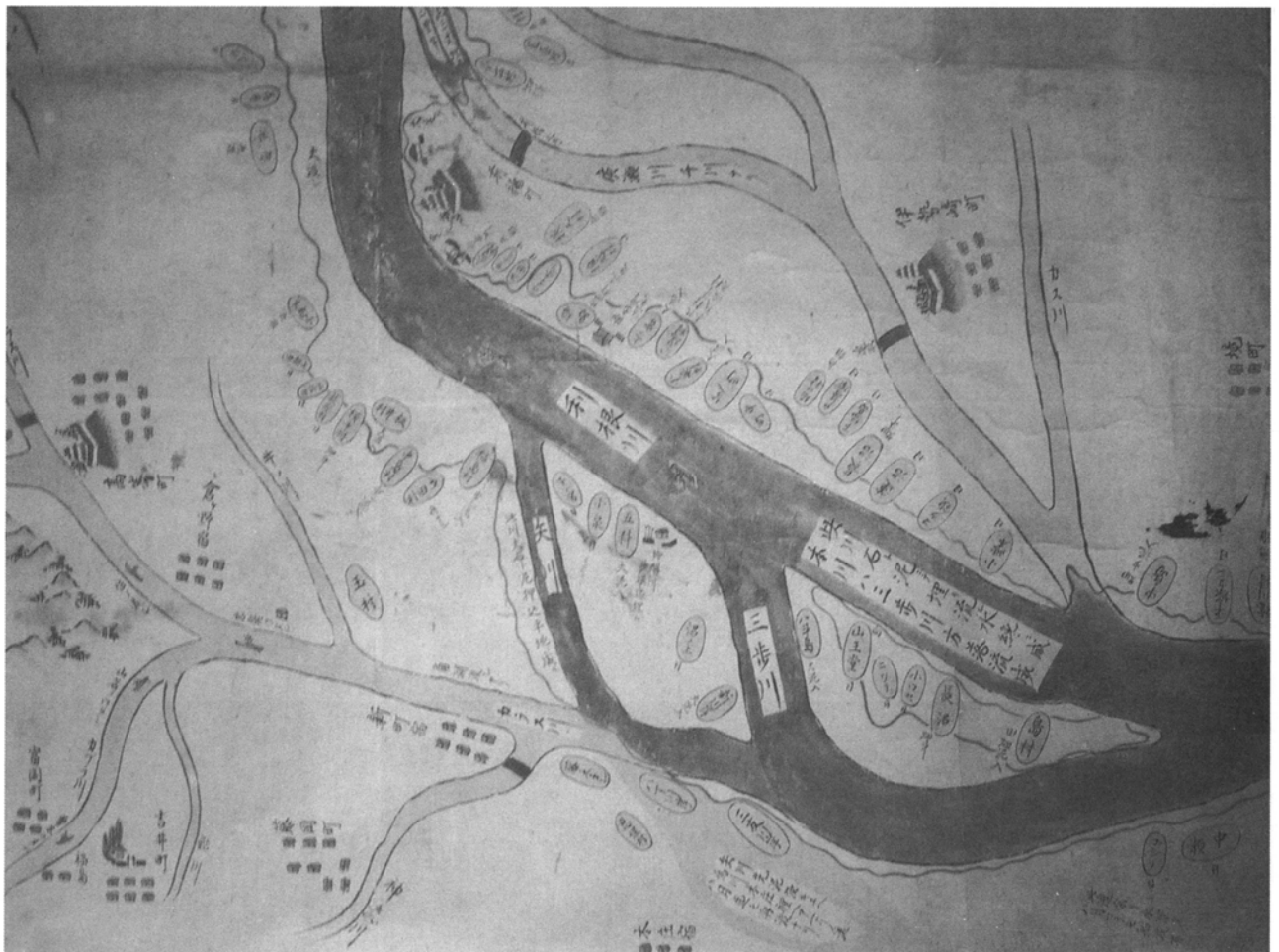
2 万年以上前に発生した前橋泥流は、天明泥流と比較すれば桁違いの土砂移動が推定され、研究者によっては渋川の利根川合流点までの堆積物と、合流点付近以降の堆積物の様相が異なる傾向があることが観察されている。このことから考えてみても、天明泥流の流下は、合流点付近で着目すべき出来事があった可能性が考えられる。

いずれにせよ、前橋～五料での人々の行動の記述は、今後の天明泥流流下の解明を知る上で重視しておくべき

点であり、この地域での基礎資料の集約は重要視されるべき内容を含んでいる。

利根川中流域の被害分布の概要は、「古文書によって、利根川両岸の泥入村々と無難の村々との分布状態をみると、①前橋付近では右岸に被害をうけた村々が分布し、②烏川の合流付近では両岸に被害村々があり、③広瀬川合流付近から下流で被害がないことが判明する。」(菊池 1981)とされている。

安政三年(1856)に写された「浅間焼吾妻川利根川泥押絵図」(群馬県立歴史博物館蔵品資料65)には、玉村町域では、「矢川大石泥押込平地ニナル」とか「川合(川井)川岸半沼(ママ泥?)入」との注記が記され、福島村(玉村町)から島村(境町)までの七分川と三分川での被害の様子や徳川郷(尾島町)付近までの被害記録が示されている。また、写真1に掲載した「天明三癸卯年七月八日浅間山大焼上州川辺通村々泥押絵図面」(個人蔵)は、被害を受けた村々を被害境界線で示そうとした被害状況絵図で、群馬県内の被害を広域的により精度高く盛り込もうとした絵図史料であり、文字記録とあわせて玉村付



【写真1】「天明三癸卯年七月八日浅間山大焼上州川辺通村々泥押絵図面」(部分・個人蔵)



近の状況を俯瞰することができる。

多くの史料には、被害にあった指標的な地点が記録されている。「福島関所泥押上流出。」(『前橋市史』)や、「福島番所江泥押上ケ番所押流、其上渡舟場水勢強相成候ニ付、当時通船相成不申候」(『群馬県史』)とか、「五料御関所焼石泥高サ壺丈程」(同)と記されている。「浅間嶽大焼泥押次第」(萩原 1986)には板井村宝蔵寺などの要所が埋まったことが記されている。五料の常楽寺には、泥で埋まるが、本堂、表門、熊野堂、鐘楼が信州佐久の人達によって掘り出された、という記録が伝わっている。

例幣使道の要所であった五料河岸は、「五料宿も一丈程泥砂が押埋め家屋二百軒流失埋没。」(『前橋市史』)とか、「沼之上村駅場五料宿江も、焼石泥壺丈程押上ケ宿役不相立、同所民家之内式百軒焼石泥ニ而埋、…」と伝えられる(「天明三年八月前橋領浅間焼破損箇所覚」)。

用水被害では、「川井村用水堀長サ千貳百間程深サ壺丈余程焼石泥ニテ埋申候。」「矢川口ヨリ長サ貳千貳百間程焼石泥にて埋申候。」「浅間山焼出記事(全)」などの記録が残されている。

天狗岩用水は現在の滝川をいい、現在の吉岡町付近で取水し、前橋市西部から高崎市東部を経て、玉村町を東に貫く灌漑用水である。玉村付近の利根川からは水位と比高の関係から取水が難しく、玉村町を潤す用水として大きな役割を担っていたことは、今日の状況と変わらない。

この分水堰は、慶長九年(1604)完成した用水で、同十五年(1610)植野堰用水大友堰から玉村町までの延長工事がおこなわれた。分水堰は「一番五千石堰」から、「二十八番上之手堰」まであったと記録されている。上流の取水口に土砂が流入し、玉村町の滝川は、この災害で給水が一時途絶えてしまっており、その後の水田の耕作に影響を与えている。その記録は、「植野堰本川并悪水抜川共長サ三千貳百三拾間程平均幅八間程深壺丈貳尺程焼石泥ニ埋候付……天狗岩堰ニ至迄干川ニ相成御料私領田方乾上り申候。」(萩原 1985) という。

利根川と烏川との合流点付近では、逆流の被害も示されている。「川筋村々流候絵図」には、「飯倉」、「川井川岸」、「新川岸」などが泥流流下の着色範囲内にある一方、「角測」、「新地村」に「無難」の記載があるが被害の境界線は明確ではない。

玉村と利根川で東に接する伊勢崎では、利根七分川が埋まってしまったことが、「利根七分川焼石泥ニ而埋、三分川之方本川ニ相成、川筋五料宿之方江付寄変地ニ相成申候」(「天明三年八月 前橋領浅間焼破損箇所覚」)と伝えられている<sup>1)</sup>。

## (2) 町内所蔵絵図と迅速図からみた被害状況の検討

到達範囲を示した前述の先行文献については、縮尺も大きくその拠点までは示されていない。

史料のうち絵図は描かれた意図を考慮すれば、到達範囲想定に参考にできるのではないかと考えられる。c 迅速図では、土地利用状況が天明泥流堆積物の影響を受けていることに起因する可能性が高いと考えた。

烏川の左岸域を扱ったa七ヶ村絵図では、「泥押田畑」が示され、「泥押」の範囲は東西へ延びる「道」が北限で、絵図上では神流川の対岸付近まで示されるが、烏川沿いの逆流西限は読み取ることはできない。この「道」については、b変更略図でみる「越後道」と考えれば、今日の「東栄寺〜摩利支天尊」に沿う旧村の通り付近が概ね天明泥流到達の南限と判断できた。

天明三年以降、その後の大水害とされる天明六年の水害は甚大だった。このことは、町南東端を扱った史料絵図、b変更略図から読み取ることができる。沼之上(五料)村の流路の南東端にあたる「新河原村」を残して、三分川よりもさらに西側に「突抜新川」が記録され、天明三年の泥流堆積範囲内での地形変化であることが読み取れる。このことから、玉村域の堆積物被害は、天明三年の泥流被害が卓越していると考えてよいと判断した。天明六年以降、地形に変化を与えたと考えられるまでの被害が確認できるのは、明治43年<sup>2)</sup>と考えれば、c 迅速図が編集された時点で、天明三年の被害状況をかなりの割合で残していたということになる<sup>3)</sup>。

以上から、記録的な天明六年の水害は考慮しなければならないが、c 迅速図では、天明三年の被災地形を踏襲した耕地利用が記録されていて、大方の被害状況を示している可能性が高いということになる。

また、前述の「浅間焼吾妻川利根川泥押絵図」で、旧矢川は、「大石泥押込平地ニナル」「川合(川井)川岸半沼(ママ泥?)入」と記され、c 迅速図でみる旧矢川の痕跡とその西側の耕地利用とが明瞭に一致することが読み取れた。

概ね8か所以上の地点で、発掘調査資料や踏査箇所とc 迅速図の「梢」や「柵」の色分けや一部「桑」の土地利用、泥流到達地点との整合性を確認できた。このことから、本作業において、c 迅速図の記録は、天明三年から今日までの地形変化に及ぶ水害前の状況をかなり良好に記録しているという評価がおこなえ、泥流到達範囲確定の有効な資料として用いることができた<sup>4)</sup>。

## 5. 玉村町の天明泥流到達範囲図

今回作成した天明泥流到達範囲図を図1に示す。本図には、平成16年度までに玉村町教育委員会と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査や試掘調査によって確認された資料を「玉村町全図」(1:10,000)を用いて集約し、遺跡の調査結果から天明泥流堆積物確認の有無を表示した。その際、確認有無の遺跡が隣接した場合には、特に到達の境界を確定できる判断材料になる

ため、敢えて、確認されない遺跡位置を白抜きで示した。

1991年刊行の『玉村町の遺跡』では、町台帳に掲載された周知の遺跡491のうち、48遺跡で天明泥流下の畑跡が確認されている。

『玉村町の遺跡』刊行以降、現在に至るまでの記録をあわせると、天明泥流下の遺跡数は82遺跡を数え、天明泥流に関する発掘・試掘調査の調査事例として今回用いた。「遺存状態が悪い」「性格が不明」などの表記がなされた過年度の資料も存在することから、さらに多くの地点で泥流堆積が確認されているものと考えられる。発掘・試掘調査の調査例の提示にあたっての所見の責は、町教委ではなく、あくまで執筆者にあることをあらかじめ確認しておく。

天明泥流到達の範囲を確認するための発掘調査・試掘項目を確認し、表1を示した。さらに、到達境界地付近で泥流が確認されなかった事例として、表2を示した。なお、両表は平成16年12月現在の内容である。これらの事例と絵図やc迅速図の判読や踏査結果をもとに到達範囲境界ラインを想定した。

実際の作業において、厳密に到達境界を確定した地点には、太実線で示した。c迅速図及び現地踏査によっても明確な想定がおこなえない場合やキャサリン台風による決壊地点などの2か所については破線で示した。なお、決壊地点については、昭和22年米軍撮影の航空写真を参照した。また、本図に含まれる町域外については、c迅速図の土地利用からみた想定線をそのまま示した。

## 6. 発掘調査事例と想定線

ここでは前章に掲載した発掘調査事例を利根川右・左岸で概観する。表1には、その遺跡の概要を示した。

また、確認された天明泥流堆積物厚は地点で異なるが、下位に堆積する浅間A軽石は、町域で概ね3～5cmの厚さで堆積が確認されている。

同表では、泥流被害をさす「泥入り」と史料に記されている、五料(旧沼之上)、川井、飯倉、小泉、下之宮、箱石、南玉、福島、上福島、斎田、板井、樋越の各村については、天明泥流堆積物を確認することができるが、この他に史料に記されている飯島村(上飯島)の「田畑に少々泥入り」(「天明浅嶽砂降記」)や、下新田村(下新田)の「大泥入り」(「天明雑変記」)に対応する事例を調査では確認していないことになる。

主な調査地点の泥流堆積の概要については、以下の通りである。

### (1) 右岸

板井地区では、2.玉村町Na603遺跡をはじめ、13か所の発掘・試掘調査で畑・水田?・溝・小土手が確認されている。泥流到達の境界の推定は、①一本木遺跡から見つかっ

ていないこと、c迅速図、聞き取りを根拠とした。しかしながら、5.天神前遺跡や6.玉村町試掘Na608からは泥流が埋め込まれた復旧溝と判断されている発掘例があるが、一次的な天明泥流堆積物に対しての復旧溝かどうかを含めて検討を要する。

斎田地区では、14.玉村町Na48遺跡を始め、5か所の発掘・試掘調査で畑が確認されている。南限についての推定は、15.玉村町Na49遺跡の南に位置する中世田口下屋敷の堀に堆積物が見つからないことから判断した。

福島地区では、19.玉村町Na149遺跡を始め、3か所の発掘・試掘調査で畑が確認されている。20.福島曲戸遺跡からは幅30～50cmの断面方形の溝が見ついている。それらの中には天明泥流堆積物や軽石が充填され、耕作に適さない軽石や泥流を被災後、溝内に収め、耕作土を掘り起こした復旧痕跡である。調査区で、天明泥流堆積物が溝内に埋められた範囲と軽石が埋められた地点が区別されていることや、d「玉村町浅間押砂地分布図」の記録により、今回の泥流到達範囲を想定した。

南玉地区では、22.玉村町Na170遺跡をはじめ、3か所の発掘・試掘調査で、畑が確認されている。このうち23.玉村町Na205遺跡は、天明三年当時の旧矢川の旧河道が見つかっている。

なお、この矢川は、前述の通り、「矢川大石泥押込平地ニナル」と記録されているが、天明泥流堆積物の上位に流水痕跡が確認されているので、その後も矢川としての流路となっていたと考えてよいだろう。矢川流路と考えられる砂層堆積を、福島・南玉・下之宮・箱石・飯倉・川井地区で、32か所(一部を表1に掲載)確認しており、c迅速図の判読にあわせて、図1に旧矢川の推定線を示している。泥流の西限の推定は、④玉村町Na171遺跡、⑤玉村町Na172遺跡から見つかっていないことやc迅速図及び絵図から判断した。

下之宮地区では、28.玉村町Na208遺跡をはじめ、8か所の発掘・試掘調査で畑が確認されている。このうち25.利根添遺跡は旧矢川の氾濫に備えたと考えられる土手が長さ58mにわたって確認され、その両側には畑が広がっていた。

箱石地区では、33.玉村町Na206遺跡をはじめ、4か所の試掘調査で畑が確認されている。

小泉地区では、42.小泉長塚遺跡をはじめ、7か所の発掘・試掘調査で畑が確認されている。

飯倉地区では、1989年の調査で泥流に埋没した古墳や畑が見つかり話題を呼んだ46.小泉大塚越遺跡をはじめ、8か所の発掘・試掘調査で畑が確認されている。

川井地区では、53.北田中遺跡をはじめ、9か所の発掘・試掘調査事例から畑が確認されている。このうち54.沖遺跡からは旧矢川の河道が見ついている。流下方向を横断するトレンチ状の調査区をもつ52.川井箱石遺跡から

表1 天明泥流が確認された事例

番号	遺 跡 名	試掘No	所 在 地	概 要	泥流厚 (cm)	備 考
1	玉村町試掘No434	434	板井870-1	畑		1993年町教委
2	玉村町No603遺跡	609	板井999-5 他	畑	160	2000年町教委
3	玉村町No26遺跡	49	板井900-8 他	畑		1990年町教委
4	玉村町No574遺跡	570	板井1506-3	水田?・ 溝・小土 手	20~85	1998年町教委
5	天神前遺跡		板井307-1	泥流復旧 溝か		※1
6	玉村町試掘No608	608	板井817-4	泥流復旧 溝		2001年町教委
7	玉村町No23遺跡	391・ 424	板井310他	畑		1992年町教委
8	天神前II遺跡		板井311-1	泥流復旧 溝		※2
9	玉村町No41遺跡	18	板井1293他	畑		1990年町教委
10	玉村町No42遺跡	188	板井1172-1 他	畑		1990年町教委
11	玉村町No44遺跡	118・ 119	板井1210	畑		1990年町教委
12	玉村町No45遺跡	166	板井1170-2 他	畑		1990年町教委
13	玉村町No46遺跡	263・ 264	板井1176-3 他	畑		1990年町教委
14	玉村町No48遺跡	149	斎田697-1 他	畑		1991年町教委
15	玉村町No49遺跡	66	斎田694-1	畑		1990年町教委
16	玉村町No51遺跡	340	斎田574他	畑		1991年町教委
17	玉村町No52遺跡	41	斎田612	畑		1990年町教委
18	玉村町No53遺跡		斎田554-1 他	畑		1989年町教委
19	玉村町No149遺跡	28	福島1195-1 他	畑		1990年町教委
20	福島曲戸遺跡		福島地内	復旧溝	40	※3
21	玉村町No565遺跡	547	福島982-3 他	畑?小道 路状遺構		1998年町教委
22	玉村町No170遺跡	53	南玉992-2 他	畑		1990年町教委
23	玉村町No205遺跡	307	南玉860-2 他	旧河川・ 畑	60	1988・1990年町 教委
24	玉村町No174遺跡	26	南玉832他	畑		1989年町教委
25	利根添遺跡		下之宮156-1 他	土手・畑	130~ 140	※4
26	玉村町No204遺跡	189	下之宮326-23	畑		1990年町教委
27	玉村町No207遺跡	217	下之宮168-4 他	畑・旧河 川		1990年町教委
28	玉村町No208遺跡	56	下之宮15他	畑		1990年町教委
29	玉村町試掘No492	492	下之宮524-1	畑		1995年町教委
30	玉村町試掘No556	556	下之宮453-2	畑?		1998年町教委
31	玉村町No210遺跡	54	下之宮663-5	畑		1990年町教委
32	玉村町No211遺跡	367	下之宮629-4 他	畑		1990年町教委
33	玉村町No206遺跡	267	箱石32他	旧河川・ 畑		1995年町教委
34	玉村町No537遺跡	483	箱石172	畑・水田・ 旧河川		1995年町教委
35	玉村町No510遺跡	408	箱石235-1 他	畑		1992年町教委
36	玉村町No458遺跡	47	箱石419他	畑		1989年町教委
37	玉村町No465遺跡	28	小泉44-6	畑		1989年町教委
38	玉村町試掘No545	545	小泉34他	畑状	50	1998年町教委
39	玉村町No466遺跡	287	小泉77-1	畑		1990年町教委
40	玉村町No467遺跡	287	小泉186他	畑		1990年町教委
41	玉村町No468遺跡	289・ 317	小泉176他	畑		1990年町教委
42	小泉長塚遺跡		小泉字長塚142 他	畑		1991~1992年町 調査会 群埋文 年報
43	玉村町No469遺跡	52	小泉216-1 他	畑		1990年町教委
44	玉村町No459遺跡		飯倉1-1 他	畑		1990年町教委
45	玉村町試掘No514	514	飯倉39	畑		1996年町教委
46	小泉大塚越遺跡		飯倉39 他	畑	40~50 (1次) 200 (3次)	1993報告書刊行 2・3次調査 (1994・2000) でも確認 群埋 文年報

番号	遺 跡 名	試掘No	所 在 地	概 要	泥流厚 (cm)	備 考
47	玉村町No460遺跡	4	飯倉18	畑		1988年町教委
48	往来遺跡		飯倉59	畑	150~ 160 (1次)	1994~1996年 町教委調査 群 埋文年報
49	玉村町No543遺跡	494	飯倉6-1 他	畑		1995年町教委
50	玉村町No480遺跡	382	飯倉243-2	畑		1990年町教委
51	玉村町No481遺跡	177	飯倉433-1	畑		1990年町教委
52	川井箱石遺跡		川井・箱石	畑		※5
53	北田中遺跡		川井35-1	畑	50	※6
54	沖遺跡		川井155-1	畑・旧河 川	120	※7
55	玉村町試掘No370	370	川井225	旧河川・ 畑		1990年町教委
56	玉村町No462遺跡	立会い	川井2098	畑		1988年町教委 立会い
57	玉村町No463遺跡	2	川井2120他	畑		1988年町教委
58	玉村町No464遺跡	262	川井2146他	畑		1990年町教委
59	玉村町試掘No633	633	川井998-1 他		46	2002年町教委
60	玉村町試掘No353	353	川井1041-4			1990年町教委
61	玉村町No470遺跡	138	五料70他	畑		1990年町教委
62	玉村町試掘No596	596	五料146-1	畑		2000年町教委
63	玉村町試掘No96	96	五料208-1 他	畑		1990年町教委
64	玉村町No471遺跡	50	五料229-2 他	畑		1990年町教委
65	玉村町試掘No635	635	五料229-18	畑	190	2002年町教委
66	玉村町No472遺跡	11	五料335-1 他	畑		1989・1990年町 教委
67	玉村町No485遺跡	59・270	五料940他	畑		1990年町教委
68	玉村町No482遺跡	152	五料376-3 他	畑		1990年町教委
69	玉村町No615遺跡	621	五料995-2	畑	220	2001年町教委
70	柄田添遺跡		上福島707 他	畑・水田		1992~1996年 町教委 群埋文 年報 ※8
71	玉村町No628遺跡	653	上福島72他	畑・水田	20~120	2003年町教委
72	玉村町No39遺跡	243	上福島198他	畑・土堤		1990年町教委
73	玉村町試掘No347	347	上福島346-1 他			1990年町教委
74	上福島中町遺跡		上福島字中町 992 他	建物跡・ 畑、他	50~150	※9
75	中町遺跡		上福島字中町	建物跡	180	※10
76	玉村町No584遺跡	584	上福島1034-1	畑	76	1999年町教委
77	上福島遺跡		上福島	畑	50~90	※11
78	玉村町No627遺跡	652	上福島1135-10 他	通路状遺 構	220以 上	2003年町教委
79	玉村町No80遺跡	305	樋越418-4	畑		1990年町教委
80	玉村町No82遺跡	398	樋越1849-1 他	畑		1991年町教委
81	玉村町No511遺跡	418	樋越1599-2	畑		1992年町教委
82	樋越諏訪前遺跡		樋越1609	※12	60	※13

備考欄には調査年・実施機関・報告(文献)を示す。

- ※1 町教委2002『天神前遺跡・大明神遺跡・北小路遺跡』
- ※2 町教委2003『天神前II遺跡』
- ※3 群埋文2002『福島曲戸遺跡・上福島遺跡』
- ※4 町教委1998『利根添遺跡』
- ※5 川井箱石遺跡調査会1999『川井箱石遺跡』
- ※6 町教委2001『北田中遺跡』
- ※7 町教委1999『沖遺跡』
- ※8 能登1996
- ※9 群埋文2003『上福島中町遺跡』, 小野2004
- ※10 中里・中島2002
- ※11 群埋文2002『福島曲戸遺跡・上福島遺跡』
- ※12 家屋・植え込み・土手・溝・溝状・畑
- ※13 町教委2004『樋越諏訪前遺跡』



図1 玉村町の天明泥到達範囲図 (「玉村町全図」を使用)



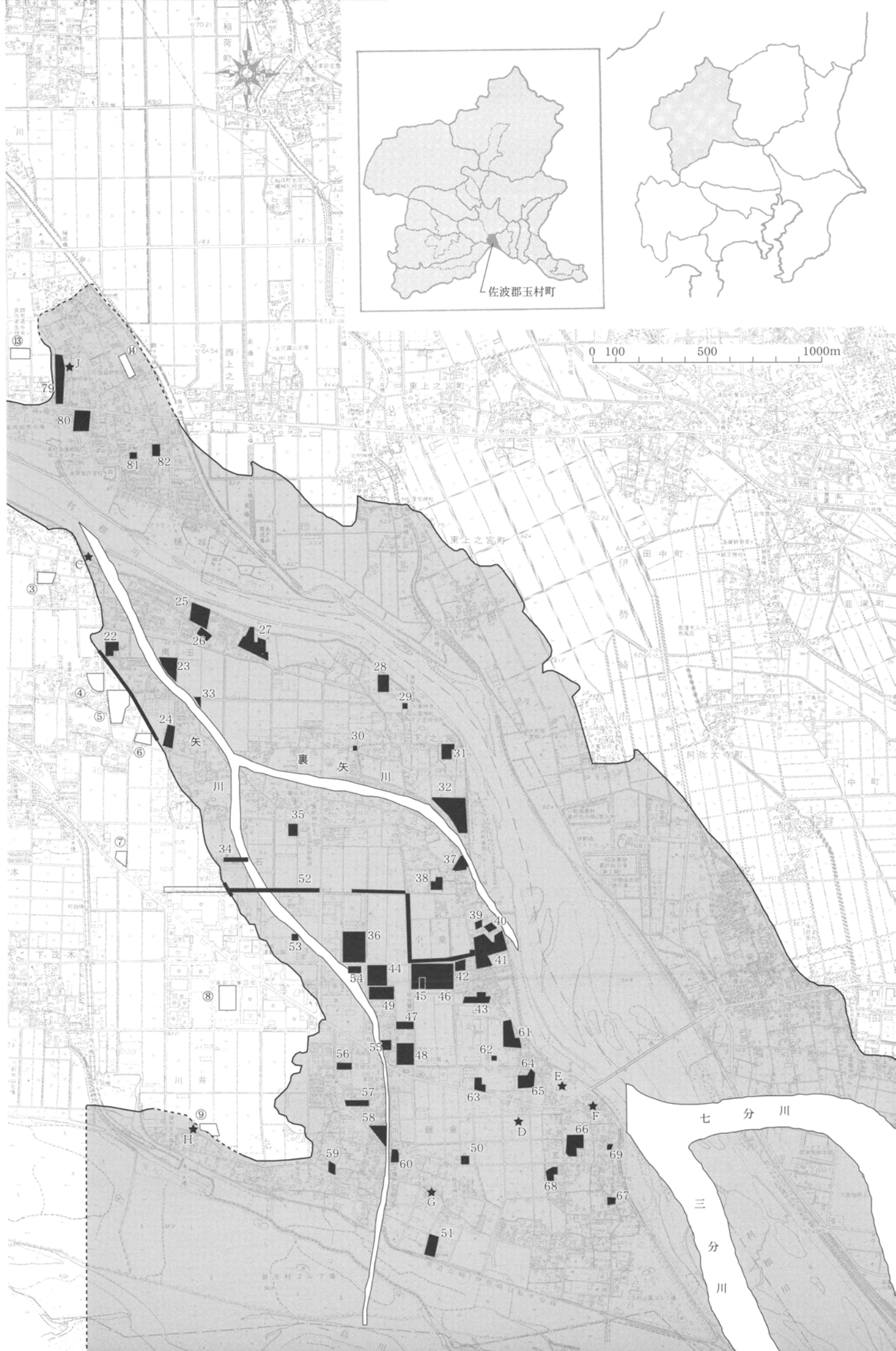




表2 天明泥流が確認されなかった事例

番号	遺 跡 名	試掘No	所 在 地	備 考
①	一本木遺跡		板井14他	※ 1
②	玉村町試掘No661	661	福島1230- 1	2004年町教委
③	玉村町No166遺跡	271	南玉623他	1991年町教委
④	玉村町No171遺跡	172・ 176	南玉927他	1990年町教委
⑤	玉村町No172遺跡	387	南玉813他	1990年町教委
⑥	玉村町No173遺跡	282	南玉831	1990年町教委
⑦	三境Ⅱ遺跡		上茂木99	※ 2
⑧	街道南遺跡		川井1848	※ 3
⑨	玉村町No461遺跡	246	川井1823	1990年町教委
⑩	金免遺跡		上福島	※ 4
⑪	玉村町No77遺跡	140	上福島387- 1	1990年町教委
⑫	上福島尾柄町遺跡		上福島字尾柄町	※ 5
⑬	神人村Ⅱ遺跡		樋越305他	※ 6
⑭	玉村町No81遺跡		樋越379- 4 他	1990年町教委

備考欄は、表1に同じ。

- ※ 1 町教委2004『一本木遺跡』
- ※ 2 町教委1997『三境遺跡・三境Ⅱ遺跡』
- ※ 3 町教委2004『横堀遺跡・街道南遺跡』
- ※ 4 町教委1989『金免遺跡』
- ※ 5 群埋文2002『上福島尾柄町遺跡』
- ※ 6 町教委1992『神人村Ⅱ遺跡』

は、泥流堆積の境界が確認されている。⑧街道南遺跡では天明泥流堆積物は確認されていない。ここでは、これまでの調査では泥流が烏川へ逆流したことを確認できる調査事例を得ることができず、今後の課題となる。

五料(旧沼之上)地区では、61.玉村町No470遺跡をはじめ、9か所の発掘・試掘調査事例から畑が確認されている。泥流厚は2mを測る地点もある。

(2)左岸

上福島地区では、70.柄田添遺跡をはじめ、9か所の発掘・試掘調査で集落や畑が確認されている。8軒の民家が見つかった74.上福島中町遺跡では、約1.5mの厚さで泥流が堆積していた。71.玉村町No628遺跡では、泥流厚の差異が著しく、南側で1.2m、北側で0.2mの厚さを測り、北東部からは泥流が確認されておらず、泥流到達範囲を特定することができる(図中の太線)。また藤岡・大胡線の拡幅に伴いトレンチ状に調査された⑫.上福島尾柄町遺跡では、天明泥流堆積物が確認されておらず、北限を特定することができる。

樋越地区では、79.玉村町No80遺跡をはじめ、4か所の発掘・試掘調査事例から畑が確認されている。82.樋越諏訪前遺跡からは家屋・畑が見つかった。

7. 踏査確認地点

発掘・試掘調査による成果の把握に加え、到達境界線を確定するためには、現地踏査を重視して作業にあたった。現在どの程度まで泥流堆積物の痕跡が確認できるかを確認する旧地形の判読が鍵となった。図1を作成する

過程で境界の判断がつきかねるところについては、特に現地踏査を繰り返した。

現地踏査で天明泥流堆積物を確認する目視的な作業の根拠としては、堆積物中に含まれる黒色の爆発角礫層の破碎岩片の確認、泥流中に2次的に巻き込まれた、追分火砕流中に含まれるキャベツ状の浅間石の分布などの特徴を確認することが肝要であった。また、河川氾濫などによる2次堆積的な土砂の中には、同様な特徴を示すものが見受けられる場合もあった。

また、実際に地面を掘り返すことが叶わないことから、民家の庭先の浅間石の分布の確認も作業の一つであった。民家宅で、持ち込まれた経緯についての聞き取りもおこなった。集落の道端や庭先、小規模な畑、寺社を観察することも範囲図作成の判断材料にした。

一連の踏査では、圃場整備など改変された耕作地からは泥流堆積の確認がほとんど望めない状況であること、さらに盛土をおこなった上で工場や住宅が立ち並んでいるのでこれについても当時の地形を偲ぶことができないことを痛感した。今回の踏査ではこうした確認の障害をカバーすべく、地域における耕地の様子や、天明泥流に関する伝承などの聞き取りを試みた。

しかし、予想に反して、天明泥流に関する伝承はほとんど聞くことができず、昭和22年キャサリン台風時の決壊地点や洪水被害について詳細な体験などを聞くことが多かった。なお、このことについては8章で改めてふれることにする。

以下に、聞き取りや踏査、史料絵図によって確認した地点記録を示す。

(1)右岸

A.羽鳥素広氏(板井地区)の話：耕作をしていると、この辺りでは5～6尺(1.5～1.8m)の泥流堆積があることがわかるという。この泥流は、東西に走る県道高崎伊勢崎線までは到達せず、八坂神社(平成16年12月に取り壊された)南の道ぐらいまでであるという。天明泥流被害に関する話や言い伝えはとくに聞かない。なお、家の北側



【写真2】羽鳥家北側に生育するケヤキ

の土手外に生育する幹高10数mのケヤキは、泥流被災直後に育ったものと伝えられている。

B. キャサリン台風決壊地点：昭和22年(1947)10月にGHQによって撮影された玉村町東部の空中写真(いわゆる米軍写真)をみると、この前月に関東地方を襲ったキャサリン台風の影響による利根川決壊の箇所が白っぽく写し出されている。福島地区天満宮境内「水害復旧碑」によると「玉村町及芝根村」における利根川警堤防決壊は6か所におよんでいて、福島地区の決壊地点は「福島橋をはさんで上流部160メートル下流部150メートル」(渡辺 1988)の範囲である。南玉地区では小字近戸が決壊地点であり、これは旧矢川の分流地点にあたる。これらのことから、天明泥流堆積物の掃流や当時の地形の変更がなされていることが想定され、範囲図の中ではこのことを反映し破線とした。

C. 旧矢川：泥流で埋もれた河川である。現在の矢川は大字福島字近戸で利根川から分流し、大字川井・飯倉を通過し、烏川へ注いでいる。過去、矢川は暴れ川であったようで、氾濫時には大字箱石の少林山堂で分流し、かつては大字小泉で利根川へ流れ込む流路があり、裏矢川と呼ばれていた。

南玉にある、利根川からの分流地点は現在の水門の付近にあたる。泥流は利根川の支流であった矢川を伝って押し寄せた。泥流の堆積により矢川の川床が高くなった結果、その後氾濫が起こり易くなった。明治初年にも利根川から分流していたが、明治18年の迅速図にはすでに榎町堰からの用水路になっている。

川井河岸問屋と本陣を兼ねていた清水六左衛門家覚によると「飛鳥井宰相が例幣使として通行の砌り矢川渡河の舳下二艘を出し五料新河岸より四人の人足を出して舟越して通行、翌(宝暦)六年四月十一日の例幣使の御通行にはじ処を…」とあり(原・中島 2001)、小舟が行き来できる規模があったことを伝えている。

D. 五料地区：常楽寺の南西には以前、神明様が祀られていたが、泥流被災のとき人々はこの小高い神明様へ登り、難を逃れたという。なお神明様は明治時代以降、飯玉神社へ合祀され、現在はない。

ちなみに小泉地区にも同様の古記録があり、「村に小高き所があり、この変時に村人ここに登り僅かにその身を完うせりという今この地を地蔵塚と称す」(『芝根村々誌』)とあり、これはおそらく古墳であったろうとも考えられる。古墳の多い旧芝根村ならではの話である。もっとも、飯倉地区の小泉大塚越遺跡3号墳は、全長55mを超える前方後円墳であるが泥流に完全に埋っており、すべての古墳が泥流埋没から逃れたわけではない。

E. 常楽寺野川家墓碑：五料の常楽寺に野川家墓地があり、災害とその後の状況が墓碑に刻まれている貴重な碑文である。碑文の「維辰宿天明三癸卯星從七月三日至八



【写真3】常楽寺

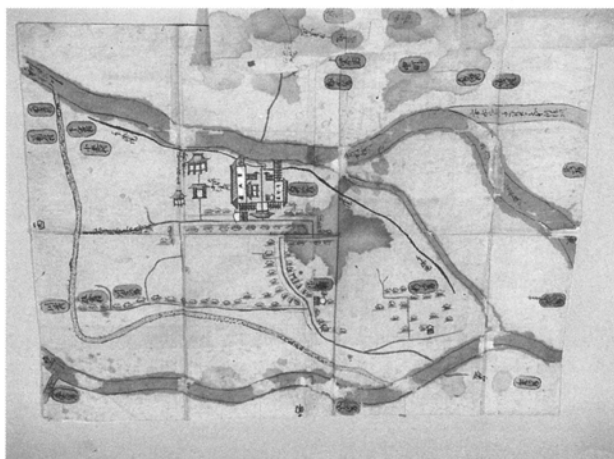
日巳時迄信陽浅間山焼砂降事一尺余同未刻混漏出押埋事一丈余同曆辰三月堀尋求漸得半数依之成含牌而以文化甲子年野川伝五右エ門盛興造補之而已」は、次の様に解釈される。

「天明三年七月三日から八日の午前一〇時まで、信州の南部にある浅間山が噴火し、砂が降ること一尺余り。少し過ぎ、未の刻(午後二時頃)になると泥流が湧き出したように押し寄せて、一丈余りも埋まった。そのため墓地の石塔は全部埋まって、翌年(天明四年、一七八四)三月、墓石を掘り、尋ねて漸くその半数を掘り出した。之によって発見されない石塔合わせて供養の碑を立てた。それは文化元年(甲子の年)野川盛興(もりおき)が造立し失った石塔を補おうとするものである。」(玉村町教育委員会 1993)

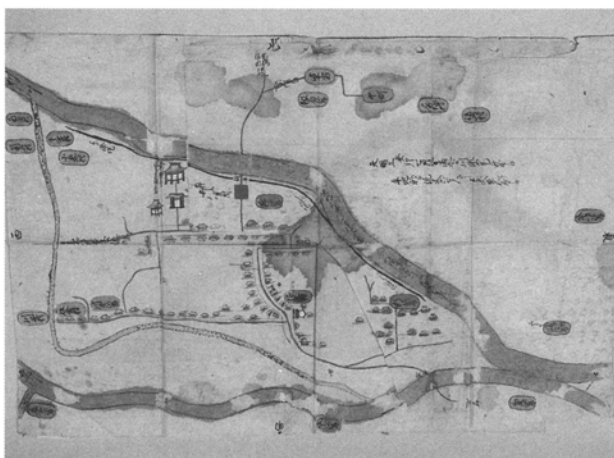
F. 五料の関所跡：b 変更略図には、被災以前の主流であった七分川が泥流で押し埋まり、三分川が利根川の主流となった様子が描かれている。さらに五料の関所が泥流で流失してしまった様子が、部分的な重ね図で表現されている。現在は跡地に礎石や井戸が残され、当時の面影をわずかに偲ぶことができる。

G. 玉村ゴルフ場及び新玉村ゴルフ場北側の東西の道(越後道)：c 迅速図を重ね合わせると、「桑」などの耕地利用や「荒」地と示された土地とが重なる。天明泥流の堆積による荒地が現在はゴルフ場として開発されたことがわかる。「a セツ村絵図」との比較によりこの周辺耕地の詳細な変遷が読み取れる。今回の想定では、同図をもとに飯倉村から川井村を経て下茂木村へ至る「越後道」を到達境界線として考えたが、次のHの事例も加味した。同図の左右に描かれるのが烏川である。

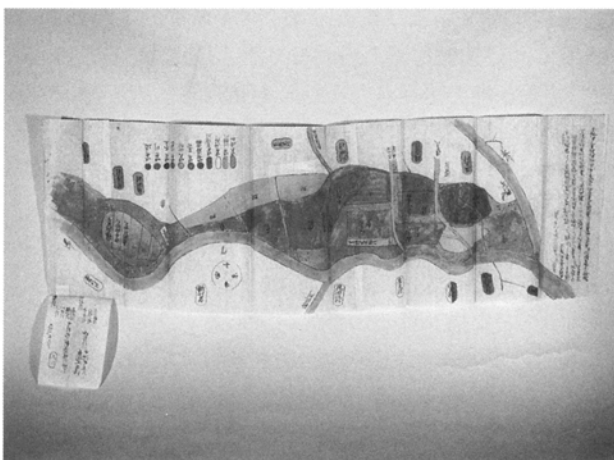
H. 川井八幡宮：昭和50年頃、川井八幡宮境内に防火用貯水槽を造るための工事が行われ、その際地下約1mの深さから、泥流によって埋まった石塔が当時の状態で出土した。一緒に出土した石仏は今でも境内に奉られている(原・中島 2001)。境内には泥流堆積物を見ることができる。しかし、東に隣接する試掘結果からは泥流堆積物



【写真4】b変更略図（「天明三癸卯七月八日泥押変更七分川三分川略図」）・被災前  
（写真上が北、玉村町歴史資料館蔵）



【写真5】b変更略図（「天明三癸卯七月八日泥押変更七分川三分川略図」）・被災後  
（同、玉村町歴史資料館蔵）



【写真6】a七ヶ村絵図（「那波郡四ヶ村 群馬郡 三ヶ村計七ヶ村地先新開願場所絵図」・写真上が北、玉村町歴史資料館蔵）



【写真7】神明宮

が確認されておらず、周辺での資料の蓄積が求められる。

## （2）左岸

I. 上樋越共同霊殿：端気川の左岸に面するこの場所には、天明泥流堆積物中にみられる破碎岩片や浅間石などが基地に点在する。これらの給源を端気川に求めるかどうかで泥流の分布は異なってくる。基地には天明三年七月の墓標もある。仮に、この地点まで利根川の天明泥流が広がったとしても、南東のクリーンセンター付近の微高地までは到達していないと考えられる。付近で玉村町でおこなわれた立ち会いでは泥流は確認されなかった。

J. 神明宮：大正年代に建てられた彰忠碑の台座には最大1m近い浅間石が用いられている。付近では、主要地方道高崎伊勢崎線が盛土され、3mほどの段差となっている。境内は窪んだ地形となつて湧水池と思われる池も残されている。北へ延びる堰堤がなくなる付近まで天明泥流堆積物が確認できる。その後の水害などで地形が変化している可能性も考えられるが、境内には浅間石で加工された石祠がいくつも置かれている。周辺で当時の地形が最もよく残されている場所の一つと判断される。また、この北側や藤川沿いには、天明泥流堆積物中にみられる破碎岩片がみられることから、給源を藤川に求めるか、利根川に求めるかで、想定範囲が変わってくる。

## 8. まとめと課題

本稿では、玉村町域に蓄積された天明三年浅間災害資料の整理を望む中島とこれまでのいくつかの事例を確認してきた関とで、1年間の検討作業の計画により、踏査と都市計画図レベルの実質的な資料の照合による集約作業をおこなった。

到達境界の推定作業で地形を考える際、常に念頭に置いたことは、天明三年以降の水害で地形がどう変わっているかという点である。手近な資料で確認できる水害記録を列挙すれば、天明六年(1786)・弘化三年(1846)・嘉永三年(1850)・安政三年(1856)・安政六年(1859)・明治

2年(1869)・明治31年(1898)・明治43年(1910)・大正5年(1916)・昭和10年(1935)・昭和12年(1937)・昭和13年(1938)・昭和22年(1947)である。度重なる水害の影響で地形は変えられてきたことが想定されるが、詳細な状況は不明であり、考古学的なデータの蓄積もほとんどみられない。

本稿の取り組みで着目できたのは、c迅速図であった。被災後約100年が経過した地形と土地利用が鮮明に記録されており、天明三年の泥流災害による地形が写し出されていると判断できた。そのため、到達範囲図には部分的な推定に大いに活用することができた。概ね8か所、c迅速図の耕地利用範囲図境界と発掘調査された遺跡のデータが一致したことが確認できた。

発掘調査の資料を用いて確認にあたる方針をもとに到達ラインを推定する中では、烏川の逆流域の発掘・試掘調査資料を得られなかった。いくつかの先行文献では絵図をもとに推定がなされているが、十分な根拠によるものとは考えられず、史料や踏査からも到達ラインを判然とさせるには至らなかった。町域でおこなわれる発掘・試掘調査などにおいて、今後の調査視点としていくべきであろう。

泥流被害に対する聞き取りでは、地元の災害伝承を尋ねても「昭和22年のキャサリン台風被害」が鮮明で、天明三年については伝承が残されていないという結果になった。これは、天明三年に関しては、災害データを得られなかったというマイナスの収穫であったが、逆に、人々の災害伝承のイメージを読み取るには一つの問題点を提示してくれた。

災害規模の見方では、江戸時代の村の単位で泥に埋まり被害を受ける規模の災害であった。しかも、1m、2mといった泥流堆積物の土砂に埋まるという大災害であり、甚大さは疑う余地がない。人的被害からみた災害規模では、1,400名以上の犠牲者が出た天明泥流と県内死者行方不明者700名以上という規模を比較する両災害であった。その後の自然災害に遭遇した場合に、災害の大小を超え、伝承よりも「自らが体験した経験に優るものはない」ということになるのかもしれない。

このことからいえば、災害の風化を防ぐためには、どのような災害が起きたかを人々が実感できるような啓発活動が要求されるのであろう。その意味で、今回のような歴史的事象への取り組みを生かし、地域的な災害教訓の継承という形で活用されることが有効かもしれない。

天明泥流到達範囲図の提示は、発掘調査のための調査視点を示す資料になるのはもちろんのこと、今日取り組まれる発掘調査成果の還元方法のひとつとして、過去の災害を正確に伝承し災害教訓として地方防災に役立てていくための基礎資料として着目できるであろう。

一方、開発が進むことで、それほどの時間を待たずし

て同様な確認作業さえもおこなえない状況がやってくるかもしれない。失われつつある近い過去を集約しておくことが、地域文化継承の役割であろうとも考え、今日、伝統や伝承が途絶えようとしている中での、ささやかな地域史的な視点で取り組んでいく必要があると考えた。

今回は、天明泥流堆積物のみを扱った。天明三年浅間災害の被害では、軽石降下や社会的な災害側面も同様に扱わなければならないかもしれない。

時間の制約と互いの日程調整から十分な成果に結びついたかどうかは疑問であるが、今後の加除修正を含めて、本取り組みが、玉村町域での天明三年浅間災害復元や地域創造のための検討材料となり、叩き台として役割を示せば幸甚である。

本稿の集約にあたっては、資料提示をいただいた玉村町教育委員会や絵図掲載に協力いただいた太田史夫氏をはじめ、関係機関及び関係諸氏に感謝申し上げます。また、路傍での聞き取りに快く教示くださった多くの方々はこの場をもって感謝申し上げます。

#### 註及び参考文献

##### 【註】

- 1) それ以前の変遷は、以下の通りである。①天和元年(1681)沼之上(五料)の土砂で埋まってしまった利根川は今の五料橋付近から戸谷塚＝福島＝富塚を結ぶ流路をつくり、境町島村まで、烏川と平行(現在の利根川)して流れることとなった。②その後、宝永二年(1705)、沼之上の土砂で埋まった河原を開削し、八町河原で烏川と合流するように戻した。しかし、このことで川欠けが頻発するようになり、その窮状を幕府に訴えた。③その結果、沼之上＝八町河原筋へ三分、戸谷塚＝福島筋へ七分と流れを分ける裁決となった。享保七年(1722)のことである。④それから60年後、天明泥流により七分川の入り口を閉塞されることになり、利根川は三分川を南下する現在の流路となったといわれている(『境町史』歴史編上1996、『玉村町誌』通史編上1992)。本稿の泥流到達範囲図内には、この推定範囲を示した。
- 2) 町内の「渡辺寿美保家文書」には、この他に弘化三年(1846)、嘉永三年(1850)、安政三年(1856)、安政六年(1859)、明治2年(1869)などに利根川満水の記録が残されているが、寛保二年(1742)、天明六年(1786)ほどの被害にはならなかったことが、記述の内容と分量の比較で推定できる。
- 3) 「渡辺寿美保家文書」(『福島治部前遺跡』2002玉村町教育委員会42頁)によれば、明治31年8月に死者2名を伴う床上浸水1.5mの暴風雨が記録されている。また、『玉村町誌』によれば、明治43年8月(以下、被害家屋等被害：玉村町、川井村、飯倉村、沼之上村、上茂木村、下之宮村)、昭和10年9月26日(上陽村・芝根村・玉村)、昭和12年7月15日水害(芝根村)、昭和13年9月1日風水害(芝根村)、昭和22年9月15日キャサリン台風(福島橋上下流池点で右岸決壊。最大2m前後の湛水。)で、c迅速図が作成された後に発生した被害である。
- 4) 玉村の下流では、その後の大水害で正確な範囲想定は不明瞭であり、利根川流域で当時の復元が可能なのは玉村ないしは、下流の伊勢崎市付近までであろうと考えられている。また、河川堆積の見地から、天明泥流自体が「泥」として流下堆積したのはこの付近までであったとの指摘がある。史料でもこの付近以降では、「泥水」や「黒濁」といった表現の記述に変わっていく節もあり、このことからしても、明確な天明泥流堆積物が確認できるのは、やはりこの付近までといえる。

##### 【参考文献】

- 大沢素治・栗原嘉二 1982～1986「五料いまむかし」No.1～50(ガリ版刷)  
菊池万雄 1981『日本の歴史災害』古今書院  
関俊明 2002「天明三年の浅間山焼け」『両毛と上州諸街道』吉川弘文館  
関俊明 2005「天明三年浅間山噴火災害遺跡の調査と成果」『日本歴史』

- 681号 吉川弘文館
- 中里正憲・中島直樹 2002「江戸時代後期の埋没建物」『群馬考古学手帳』12
- 中島直樹 2005「天明の泥流で埋もれた遺跡について―群馬県佐波郡玉村町の事例―」『群馬文化』281号 群馬県地域文化研究協議会
- 能登健 1996「中・近世の農業」『考古学による日本歴史』十六 産業Ⅰ 狩猟・漁業・農業 雄山閣
- 萩原進 1975「村をのみこんだ泥流」『国土と教育』32築地書館
- 萩原進 1985『浅間山天明噴火史料集成』Ⅰ 群馬県文化振興会
- 萩原進 1986『浅間山天明噴火史料集成』Ⅱ 群馬県文化振興会
- 原眞・中島直樹 2001「埋没河川の景観復原」『研究紀要』19財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 若月勝男 1986「天明の浅間山噴火について」『玉村町誌研究』（その一）玉村町中央公民館
- 渡邊一弘 1999『天狗岩堰用水史』天狗岩堰土地改良区
- 渡邊一弘 2000「天狗岩用水をめぐる町村」『群馬文化』264号 群馬県地域文化研究協議会
- 渡辺襄 1988「昭和二十二年利根川水害と復旧事業抄録」
- 早川光三郎 1982「浅間山爆発」『玉村町のあれこれ』上 玉村町中央公民館
- Maya Yasui・Takehiro Koyaguchi 2004 *Sequence and eruptive style of the 1783 eruption of Asama Volcano, central Japan: a case study of an andesitic explosive eruption generating fountain-fed lava flow, pumice fall, scoria flow and forming a cone* 『Bull Volcanol』 66.
- 群馬県 1986『群馬県史』資料編14
- 群馬県文化振興会 2003『群馬郷土史事典』
- 前橋市 1973『前橋市史』2
- 前橋市立図書館編 1998『前橋藩松平家記録』第13巻
- 川井箱石遺跡調査会 1999『川井箱石遺跡』
- 芝根村 1910『芝根村々誌』
- 玉村町 1935『玉村町郷土誌』
- 玉村町 1992『玉村町誌』文書編
- 玉村町 1992『玉村町誌』通史編 上
- 玉村町 1995『玉村町誌』通史編 下巻二
- 玉村町歴史資料館 1998『五料宿』（平成10年度企画展パンフレット）
- 玉村町教育委員会 1989『金免遺跡』
- 玉村町教育委員会 1992『神人村Ⅱ遺跡』
- 玉村町教育委員会 1993『小泉大塚越遺跡』
- 玉村町教育委員会 1996『平塚堰北遺跡』
- 玉村町教育委員会 1997『三境遺跡・三境Ⅱ遺跡』
- 玉村町教育委員会 1998『利根添遺跡』
- 玉村町教育委員会 1999『沖遺跡』
- 玉村町教育委員会 2001『北田中遺跡』
- 玉村町教育委員会 2002『天神前遺跡・大明神遺跡・北小路遺跡』
- 玉村町教育委員会 2003『天神前Ⅱ遺跡』
- 玉村町教育委員会 2004『横堀遺跡・街道南遺跡』
- 玉村町教育委員会 2004『一本木遺跡』
- 玉村町教育委員会 2004『樋越諏訪前遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990「柄田添遺跡」『年報』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 発掘調査報告書第302集 『上福島尾柄町遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 発掘調査報告書第309集 『福島曲戸遺跡・上福島遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 発掘調査報告書第318集 『上福島中町遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 発掘調査報告書第319集 『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』